

『魂のささやき』より抜粋

62 空論と実地

空論と実地とは、言わして見れば調子はよく合うけれども、実地問題に出会った時に今迄の喜びが裏切られるか、より以上に勇猛心を獲て見事乗り切るかである。

信仰は理屈だけの問題でなくて、親子の一体に融け合う体験の世界を諦得しなければならぬ。
ない。 堕ちる者をお助けは誰でも疑うてはいないけれども、疑う余地のなくなつて救われた
た
大安心まで進み切る人がいないのだ。

訳が判らなければ信仰に入る事は出来ないが、 訳が判ただけでは信仰とは言えないのだ。
何となれば 御飯は空腹を満たして呉れると言う事を知らなければ食べようとしな

い。しかし食べたら満腹するということを知りつつも、食べなければ知らない者と同様に空腹である。

御飯を食べれば飢えを満たされると言う事を知っていても、五日六日思い続けても少しも満腹はしない。水を飲めば渴は医せられると言う事は承知して、毎日思い続けても喉の渴きは止まりはすまい。唐辛子は辛い、火は熱い、氷は冷たい、指を切れば痛いと言う事を知らない者はいないが、知ったので熱いか、冷たいか、痛いか、何ともあるまい。子供を失うたから辛かろう、物にぶちあたったら痛かろう、千年経っても痛くも痒くもあるまい。実地その場に立った時、だろうとか、かろうとかの想像で間に合うものか 震災にでも出逢って五日も七日も食物にありつかず、一歩も歩けなくなった時、食べさえすれば満腹すると思うているので満足出来るか。登山して疲れ果てた時、酸素が一で水素が二の化合したものが水で、飲めば渴きが止まると知っていたので甘露の味が有るか。辛い辛いと口で言ってい

るのでは真の辛さも判るまいが、唐辛子、塩、わさび、醤油の味は食べて見なければ判るまい。火を燃やしている時も 接近すれば熱いには違ひないけれども、猛火に包まれた時と比較にはなるまい。子供を亡くした親の心は、子供を持たない者の想像の及ぶ所ではあるまい。

今他力不思議の宗教を聞くにしても、如実の聞き方と不如実の聞き方が有るぞ、墮ちる者をお助けと思うているのでは助かつてはいないぞ、疑いさえしなければよいと思うているのは思うているだけで味が無いぞ、はいと真受けにしさえすればよいと言うのは型だけ知つたので浮いた話だぞ、他力だからそんな難しい事はないと思つているのは 向こうばかり眺めて足元の判らない人の言つてゐる言葉だぞ。死にさえすれば仏様にさして戴くのだと思つてゐる者は 隣の金倉の夢を見て喜んでゐるのだぞ。仮令八万の法蔵を読み破つても自分の心の解決の付いてゐない者は画いた餅を並べてゐるにも等しいぞ。

仰せの通りに聞け、素直に聞けと言つてゐるが本当に素直に聞いているか、感情が調子を

合^あわし、涙^{なみだ}を流^{なが}して喜^{よろこ}ぶのを他^た力^{りき}の信^{しん}仰^{こう}の様^{よう}に心^{こころ}得^えているが、それが本^{ほん}当^{とう}に素^す直^{なお}なのか。も

一^{ひと}つ下^{した}に何^{なん}ともない自^じ性^{しょう}の心^{こころ}が奥^{おく}底^{ぞこ}に蟠^{わだかま}ってはいないか、感^{かん}情^{じょう}だけ^{だけ}は墮^おちるものをお助^{たす}け

で助^{たす}かる積^{つも}りでいるけれども、飢^うえた自^じ性^{しょう}は未^まだ助^{たす}かつてはいないと言^いいはせぬか、感^{かん}情^{じょう}は

其^その儘^{まま}と聞^きけと言^いっているけれども、自^じ性^{しょう}は其^その儘^{まま}になれんと言^いってはおらないか、

感^{かん}情^{じょう}は死^しにさえすれば往^{おう}生^{じょう}と御^ご教^{きょう}化^{くわ}に調^{ちよう}子^しを合^あわしているけれども、自^じ性^{しょう}は今^{いま}解^{かい}決^{けつ}が

付^つかないのに死^しんだ後^{のち}が当^あてになるものかと言^いってははいないか、感^{かん}情^{じょう}は仰^{おお}せ御^ご尤^{もつと}も

と合^が点^{てん}が出^で来^きるけれども自^じ性^{しょう}は逆^{ぎやく}に悶^{もだ}えて来^きはせぬか。

話^{はなし}では大^{だい}満^{まん}足^{ぞく}は出^で来^きないぞ、自^じ分^{ぶん}自^じ身^{しん}が自^じ分^{ぶん}の感^{かん}情^{じょう}に誤^ご魔^ま化^かされて如^に実^{じつ}に自^じ性^{しょう}が照^てら

し出^だされていないではないか。

素^す直^{なお}に聞^きけと言^いっているが素^す直^{なお}に聞^きいてはいないではないか、唯^{ゆい}除^{じよ}五^ご逆^{ぎやく}誹^ひ謗^{ぼう}正^{しょう}法^{ぽう}と除^{のぞ}か

れている機^きであるが、其^その恐^{おそ}ろしさに驚^{おどろ}いた事^{こと}があるか。

觀經の五逆十惡具諸不善は、素直なと自惚れている機であるが、身の毛のよだつ思いをした事があるか。出離の縁有る事なしと投げ出したのも三定死の立場に立ったのも、善人らしい粧うて参れると思ひ込んでいる機が、調熟の光明に照らし出されて白状した時の叫び声であるが、そこまで素直に聞いているか。死に物狂いに求め抜いて、何れの行も及び難き身なればとても地獄は一定住家ぞかしと、自力無効を看破されたのは、口の先で墮ちる者と思うていればよいと言う様な生やさしい態度ではないぞ。真に墮ちた覚えがないから、攝取不捨の慶びが無いではないか。素直に聞いているのなら、衆生一切の無明の闇を晴らし、衆生一切の志願を満足せしめ給うと仰せられてあるが、一切の闇は晴れたか、ひよつとが除かれたか、十方法界が無条件で戴けたと言う大満足が有るか。

行者正しく金剛心を受けると言っているが、親の金剛心が子供の金剛心になるのだから、凡夫は明らかに聞き抜き往生に対する苦抜けがしなければ攝取されたのではないぞ、機を

見れば恐ろしい、手間が掛かるとか言っているのは 未だ解決の付いていない事を白状して
いるではないか。この逆謗闡提の機が生かされたのなら 見なければ御恩は慶ばれない
ぞ。 見るのが恐ろしくては機法一体仏凡一体ではないぞ。

何を愚図愚図しているのか、言葉だけでは満足出来ないぞ、言葉の裏に溢れている如来
聖人の念力に触れなければ大安心は出来ないぞ。

道俗よ、そんな求道の態度は成ってはいないではないか、火花は散ってはいないではない
か、話を聞いているのか、実地に求めているのか、実地に求めているのなら、 苦の抜ける
迄進まなければならない、信楽開発の境地に出なければならない、現生不退正定衆の分人
にならなければならない、 聞の一字で五十二段を超証しようと言うのに 居睡り半分で死
にさえすれば往生とは何を寝言言っているか、 今解決の付いていないものが 死んだ先で
解決が付くものかい。今の心は御法を聞きながらも 闡提の機だから受け付けていないでは

ないか。

こんな難しい法なら聞き初めなければよかったと思う時は誹謗してゐるではないか。法が難しいのではなく機がむつかしいのだ。

火花散らして求むれば求むる程 底の知らない罪惡に驚かされ、何物も間に合わなくなつた時、心の底から出離の縁有る事なしと叫び上げたのでなければ 自力無効と投げ出してゐないのだ。

この境地に立つた時、惡人を惡人ながら赦すぞー の声なき声に動かされ、廣大難思の慶び、立ちどころに他力摂生の旨趣を受得せりの大満足、仏智満入の不思議の靈感！ 言葉以外の言葉を聞き抜いた境地、難中の難を切り抜けた先の 易いと言う言葉まで間に合わない眞の易さに生かされるのである。